

八八艦隊海戦譜

開戦篇

横山信義

Nobuyoshi Yokoyama

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

扉 画 高荷義之
地図・図版 安達裕章
編集協力 らいとすたつふ

目次

序章

9

第一章 戦雲

45

第二章 帝国の選択

61

第三章 最終判断

109

第四章 巨大なる号砲

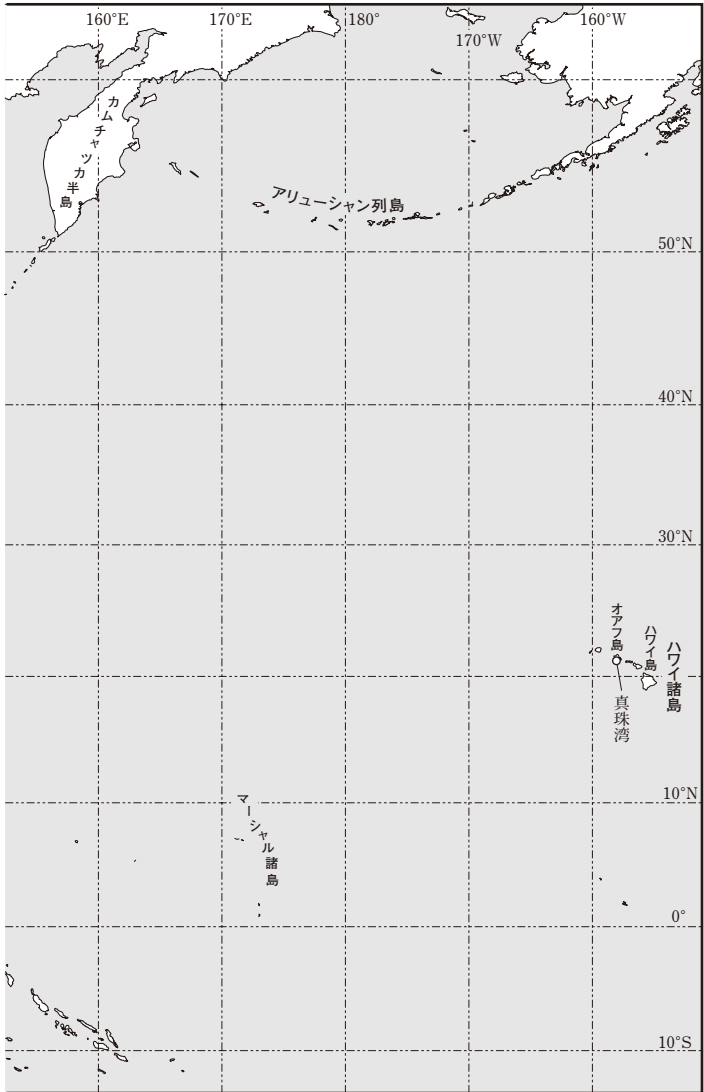
151

第五章 最初の激突

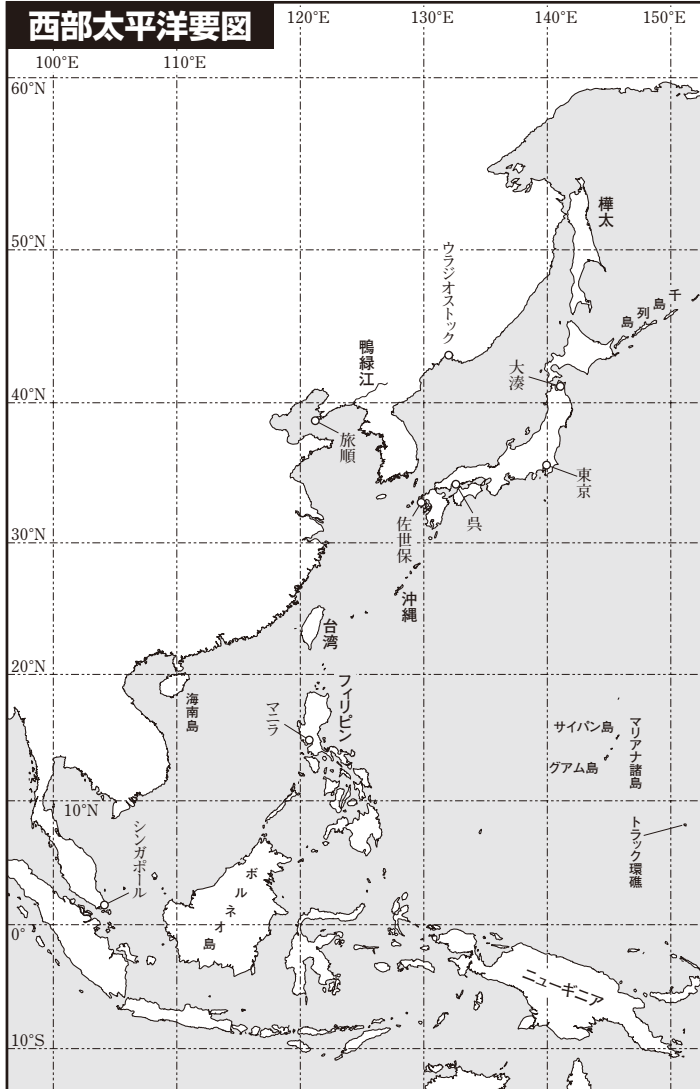
183

第六章 東方の敵

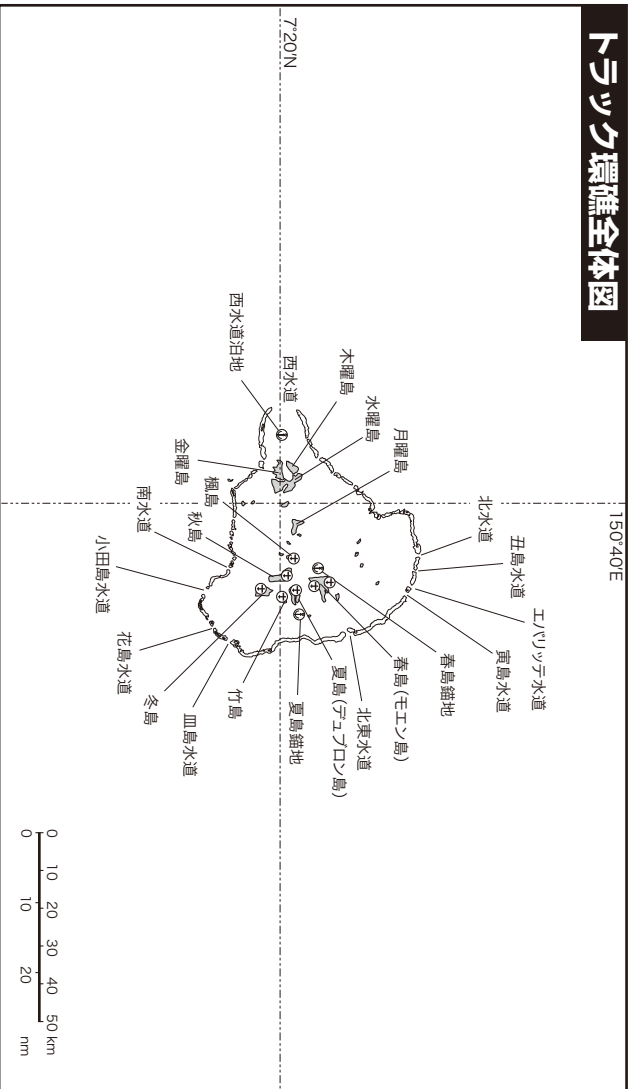
235



西部太平洋要図



トラツク環礁全体図





八八艦隊海戰譜 —開戰篇—

序 章

1

褐色の砲煙が、海上に立ち上った。

「始まりました!」

高速戦艦「榛名」二番機の機長と操縦員を兼任する庄司久平特務少尉の耳に、ペアを組む偵察員太田秀美一等飛行兵曹の声が届いた。

庄司は、乗機——九五式水上偵察機の高度を二〇〇メートルに保ち、地上の様子を見守った。

乗艦である「榛名」は、姉妹艦の「比叡」と共に、鴨緑江の北西岸、つまり紛争前から満州の支配領域だった場所を射撃目標としている。少し離れた空域に、「比叡」の観測機が見える。

地上には、敵の地上部隊が視認できる。

上空の水偵に対しても、激しい抵抗が予想されたが、今のところ敵の戦闘機が姿を見せる気配も、地上からの対空砲火もない。

聞こえるのは、中島「寿」二型改二エンジンの爆音と、風切り音だけだ。海上の戦艦とは距離があるため、砲声もほとんど聞こえて来ない。

地上の八箇所に火焰が躍り、狼煙を思わせる褐色の爆煙が立ち上った。うち四箇所が、「榛名」の砲撃によるものだ。

「榛名」と「比叡」の射弾は、二万五〇〇〇メートルの距離をひと飛びし、鴨緑江北西岸のソ連・満州連合軍——略称「ソ満軍」の陣地に落下したのだ。

鴨緑江の対岸にも、北西岸同様、複数の爆煙が見える。

「榛名」「比叡」と共に、黄海に出撃した姉妹艦「金剛」と「霧島」の射弾だ。

こちらは、鴨緑江の南東岸——日本領朝鮮に越境したソ満軍の橋頭堡が目標だった。

鴨緑江の河口沖を遊弋する高速戦艦四隻が、第二射を撃った。

「榛名」「比叡」の射弾は鴨緑江の北西岸へ、「金剛」

「霧島」の射弾は南東岸へ、それぞれ飛ぶ。

国境の河の両岸に、弾着の閃光が走る。

巨弾の炸裂が川岸を大きく抉り、爆風が川面に波を立てる様が、はつきり分かる。

掃り鉢状に抉られた大地から、大量の土砂が爆風に乗って舞い上がり、炸裂音が観測機のコクピットにまで伝わって来る。

莊司は、地上の様子に目を見張った。

川岸付近に、巨大な爆炎が見える。何十メートルにも広がり、地上をのたうち、戦車やトラックを呑み込んでいる。

戦艦の主砲が、陸軍の火砲よりも大きな威力を持つと言っても、火災の規模は尋常なものではない。燃料か弾薬の集積所を直撃し、誘爆を起こさせたのかもしれない。

「『命中弾』。効果甚大」。『榛名』に打電します」

太田の声が、伝声管を通じて伝わる。

「まだまだだ、ソ満軍」

莊司は、口中で呟いた。

直撃弾は一発だけだが、高速戦艦四隻による艦砲射撃は始まったばかりだ。

事前打ち合わせでは、鴨緑江両岸の敵陣地を碁盤の目のように区切り、その全てに主砲弾を叩き込むと聞かされている。

射弾の大部分は無駄になるかもしれないが、射撃目標の範囲内に位置するソ満軍は、戦車であれ、火砲であれ、防御陣地であれ、ことごとく爆砕され、叩き潰されるはずだ。

莊司の言葉に触発されたかのように、「榛名」と「比叡」は第三射を放った。

砲煙の量から判断して、各砲塔一門ずつの交互撃ち方のような。両艦の砲術長は、弾着修正はまだ不充分と考えているらしい。

若干の間を置いて、「榛名」「比叡」の射弾が落下する。

地上の八箇所には爆炎が躍り、新たな煙が立ち上る。

更にもう一度、交互撃ち方による砲撃が行われたところで、

「『榛名』斉射！」

太田が、弾んだ声で報告した。

莊司は、ちらと海上に目をやった。

湧き上がる砲煙の量が、これまでよりも増えたようだ。

四隻の高速戦艦は、全主砲を揃えての斉射に移行したのだ。敵陣地には、重量八〇〇キロの三六センチ砲弾が、三二発ずつ降り注ぐことになる。

装薬の炸裂に伴う大量の砲煙は、艦の航進に伴って発生する気流にさらわれ、金剛型高速戦艦が精悍な艦影を現す。

莊司が海兵団に入団し、海軍軍人として歩み出したときには、金剛型はひよる長い三脚檣と三本の煙突を屹立させた姿だったが、現在は全くの別の姿に変貌を遂げている。

日露戦役時の軍艦を彷彿とさせる三脚檣の代わり

に、城の天守閣を思わせる巨大な艦橋がそびえ、煙突も二本にまとめられている。

その艦が、四艦合計三三門の三六センチ主砲を揃え、鴨緑江を越えて侵攻してきたソ満軍に巨弾を叩き込んでいる。

砲弾は、大気を激しく鳴動させながら、鴨緑江の流れや川岸の真上をひと飛びし、ソ満軍の頭上から落下する。

観測機のコクピットからでは、地上で展開されている地獄を、間近に見ることはない。

ただ、地上に上がる爆煙や、そそり立つ火柱の位置を観測し、自らが所属する艦に通信を送るだけだ。

後席で、太田が弾着観測と「榛名」への打電に当たっている間、莊司は周囲の空域と地上を交互に観察している。

情報によれば、鴨緑江の紛争では、空中戦が度々生じたとのことだ。

朝鮮に配置されている陸軍航空隊の九七式戦闘機や九七式軽爆撃機が、ソ満軍が繰り出した戦闘機と銃火を交えたのだ。

九五式水偵は、七・七ミリ固定機銃、同旋回機銃各一丁を積んでいるが、戦闘機が相手では分が悪すぎる。

エンジン出力を一杯振り絞っても、最大時速は二九九キロが限界であり、上昇性能も高度三〇〇〇メートルまで六分三一秒を要する。

複葉機のポリカルポフI15であれば、何とか戦えないこともないだろうが、単葉機のI16はかなりの強敵だ。

最悪の事態を避けるためには、早期の敵発見が不可欠だ。

「榛名」が第二斉射を放った直後、太田が叫んだ。

「左前方に発射炎らしきものを確認！ 高度一〇〇〇メートルまで降下願います」

「よっしゃー！」

莊司は、操縦桿を左に倒した。

九五式水偵が左に大きく傾斜し、旋回しながらの降下に入った。

莊司は計器と地上を交互に見ながら、慎重に高度を下げる。

二〇〇〇を指していた高度計の針が、一九〇〇、一八〇〇と下がり、鴨緑江の北西岸や、ソ満軍の陣地がせり上がって来る。

高度が下がるにつれ、戦車や装甲車、火炮の形状がはっきりして来る。

兵器だけではなく、指揮所とおぼしき天幕や、軍馬の姿も見える。

（有名なコサック騎兵の馬か、砲の牽引用の馬か、どっちだろう？）

そんな想念が、ふと莊司の脳裏をよぎった。

一〇〇〇メートルまで降下したとき、

「あれか！」

莊司は、叫び声を上げた。

多数の火砲が仰角をかけ、砲門を海に向けている。数は、ざっと二〇門。

防楯や基部は、樹木によつて偽装されているが、上空から見下ろせば一目瞭然だ。

周囲では、多数の敵兵が慌ただしく動き回っている。ソ連兵か満州兵かまでは、区別がつかなかった。敵の火砲が、一斉に発射炎を閃かせた。

砲口から真紅の火焰がほとばしり、褐色の砲煙が漂い流れた。

距離が一〇〇〇メートルと近いためだろう、砲声は莊司機のkokピットまで伝わって来る。

乗艦「榛名」の砲声を間近で聞くほどの迫力は無いが、二〇門の砲が一斉に射弾を放つ音は、大地そのものが怒りの咆哮を上げているかのようなのだ。

「艦上からは見えそうにないな」

莊司は、地形を観察して呟いた。

ソ満軍の砲陣地は、丘の陰に隠れている。

「榛名」や「比叡」の艦橋からは、土地の起伏に

妨げられ、砲を目視することはできないはずだ。

「砲陣地の位置を、『榛名』に打電しろ」

莊司が太田に命じたとき、地上に砲のものととは異なる閃光が走った。

大きさは、火砲のそれとは比較にならない。上空から見下ろせば、線香花火ほどの光にも見えない。

ただ、数だけが多い。

莊司機の姿を認めた敵兵が、機関銃を撃っているのだろう。

歩兵用の機関銃程度では、一〇〇〇メートル上空まで届きはしないが、敵も撃たずにはいられないのだ。頭上を小うるさく飛び回る九五式水偵を指さして、罵り喚きながら機関銃を撃ちまくる兵の顔が、目の前に浮かぶようだった。

莊司は操縦桿を手前に引き、エンジン・スロットルを開いた。

「寿」二型改二が快調に回り、九五式水偵が上昇に転じた。

「榛名」や「比叡」に反撃の砲火を放っている敵の
 火砲も、その周囲で機関銃を撃ちまくっている敵兵
 も、みるみる遠くなつてゆく。

「砲陣地の位置、打電終わり！」

太田の声が、レシーバーに響いた。

莊司が地上を見やつたとき、敵の砲口に、新たな
 発射炎が閃いた。

三秒ほどの間を置いて、砲声の水偵のコクピット
 に伝わった。

2

「撃て！」
アゴーシ

鴨緑江の北西岸で、一二二ミリ野砲二一門の指揮
 を執つていたミハイル・クリムツォフ大尉は、砲声
 に負けぬほどの大音声で叫んだ。

たつた今、上空に飛来した日本軍の水上機が、沖
あ合いの艦隊に砲陣地の位置を通報したことは間違い

ない。

間もなく、あの恐るべき巨弾が飛んで来るであら
 うことを考えれば、陣地転換を行うべきだが、一二
 ミミリ野砲は移動にかなりの時間を要する。

ならば現在の陣地を死守し、最後まで戦うべきだ、
 と判断した。

大仰角をかけられていた一二二ミリ砲が咆哮する。
 砲口から真っ赤な火焰がほとばしり、雷鳴のごと
 き砲声轟き、灼熱した大気が砲兵たちの顔面を
 はたく。

重量二四・九キロの一二二ミリ砲弾が、秒速八〇
 ○メートルの初速で叩き出され、沖合いの敵艦目が
 け飛翔する。

クリムツォフの部隊が指揮する陣地だけではない。
 より河口に近い場所に位置する砲陣地や、鴨緑江
 の南東岸——日本領に侵攻した部隊の砲陣地からも、
 反撃の射弾が放たれている。

撃っているのは、一二二ミリ野砲がほとんどだ。

一二二ミリ野砲より破壊力が大きい二〇三ミリ榴弾砲や、最も装備数の多い七六・二ミリ野砲は、射程距離が足りないため、沈黙している。敵艦が射程内に入ってくれば、即座に砲撃を開始するであろうが、今のところ敵にその動きはないようだ。

砲声が一旦収まったとき、

「敵艦発砲！」

の報告が届き、巨弾の飛翔音が聞こえ始めた。

演習時に何度も聞いたことがある、七六ミリ砲弾や一二二ミリ砲弾のそれとは、桁違いの巨大な音だ。空そのものが落下してきたら、さもありませんと思わされる。

敵弾は、クリムツォフが指揮する砲陣地の頭上を飛び越え、内陸に落下する。

敵弾が落下した瞬間、大地全体が激しく震動し、何人かの兵がよろめく。

クリムツォフの側では、ヴァシリイ・コロリョフ二等兵が時間を計測している。顔にそばかすが残る

若い兵だ。

「三〇秒経過……四〇秒経過……弾着、今！」

若々しい声が報告するが、若干の時を経て、

「弾着、全て敵艦の手前です。届きません！」

観測員のレフ・パーニン軍曹が、絶望的な声で報せて来る。

「砲撃続行！」

クリムツォフは構うことなく、顔面を真っ赤に染めて下令する。

赤軍砲兵の意地にかけて！

その意を込めたかのように、新たな砲声が轟く。

二一発の一二二ミリ弾が、鴨緑江河口の沖に浮かぶ日本軍艦目掛けて飛翔する。

入れ違いに、新たな敵弾の飛翔音が聞こえ始める。避退中の戦車隊の近くに、一発が落下した。

凄まじい地響きと共に火柱が上がり、近くにいたBT7——赤軍自慢の快速戦車が、ひとたまりもなく

消し飛んだ。爆砕などという生易しいものではない

い。爆発光が走ると同時に、消失してしまった。

同時に、後続していたBT7一輛りようが大きく仰け反り、けたたましい音と共に横倒しになる。

前方を避退していたBT7一輛は、飛び散る破片や弾片に履帯りたいを切断され、大きく左に旋回したところで動かなくなる。

鴨緑江の川岸では、日本軍の戦車を一蹴し、歩兵を蹂躪じゆうりんしてきた強力な戦車も、遙かな遠距離から撃ち込まれる巨弾には、抗するべくもなかった。

「弾着、今！」

クリムツォフの傍らで、コロリョフの上ずったよな声が響く。

ちらとその顔を見ると、両眼が吊り上がり、顔面がひきつり、追いつめられた獣を思わせる表情になっている。

コロリョフに限らず、赤軍のほとんどの将兵が、経験したことのない大口径砲弾による砲撃だ。ともすれば、恐慌状態きょうこうに陥りそうになる自らの心を、

懸命に抑えているのだろう。

パーニンが砲撃の無効を報せた直後、新たな敵弾が飛来した。

今度は二発が、クリムツォフの肉眼で確認できる場所に落下した。

一発は、安全圏に避退しようとしている歩兵たちの近くに落下した。

火柱がそそり立ち、大量の土砂と共に、赤軍の兵士たちが吹っ飛んだ。紙人形が、暴風に吹き飛ばされるような眺めだった。

比較的離れた場所にいた兵も、爆風になぎ倒されて血反吐ちへどを吐いたり、飛び散る弾片に肉体を切り裂かれたりして、朱あけに染まって倒れてゆく。

あたかも、見えざる巨大な手が、兵士たちを薙なぎ払い、叩き伏せているかのようだ。

もう一発は、補給用の物資を積んだトラックの近くに落下した。

横殴りの爆風を受けたトラックは、ひとたまりも

なく横転し、荷台が捻れるようにして引きちぎられた。可燃物を積んでいたのか、横倒しになった荷台の内部で、鈍い音を立てて爆発が起こり、荷台全体が炎に包まれ、大量の黒煙が噴出した。

横転したトラックを避けようとしたT26——BT7と共に、日本軍の歩兵を蹴散らしてきた軽歩兵戦車が、砲弾孔に落下する。

T26は、蜘蛛の糸にかかった虫がもがくように、履帯を回すが、どうやっても孔からは脱出できない。その間に、次の敵弾が飛来し、大地に深々と孔を穿ち、大量の土砂を噴き上げる。

砲弾孔から脱出しようともがくT26の頭上から、大量の土砂が降り注ぎ、三名の乗員を生きながら戦車もろともに埋葬してゆく。

鴨緑江の川面にも、敵弾は繰り返して落下している。川岸の近くであれ、流れの中央であれ、大気を激しく鳴動させながら落下した巨弾は、おどろおどろしい炸裂音と共に、大量の川水を噴き上げる。

川底の泥をたつぷりと含んだ川水が、夕立のような音を立てて、川面や川岸に落下する。

満州から日本領朝鮮に、地上部隊を渡した浮き橋——舟艇を横に並べてつなぎ合わせ、その上に厚い木の板を敷き並べた橋は、一瞬で爆砕され、無数の木片に変わる。

川面にばらまかれた浮き橋の残骸は、鴨緑江の流れに乗って、黄海へと運ばれてゆく。

「何てことだ。いったい、何てことだ……！」
クリムツォフは、髪をかきむしって呻いた。

帝政時代から、ロシアの陸軍は世界最強だと信じてきた。ソビエト連邦と名が変わり、近代化も進んだ今、ロシアの陸軍は更に強くなつたはずだった。

その實力は、鴨緑江を挟んだ武力衝突で存分に発揮され、朝鮮に駐留していた日本の陸軍を、完膚無きまでに叩き伏せた。

かつて皇帝の陸軍に苦杯を舐めさせた日本の陸軍も、近代化された赤軍の前には歯が立たず、鴨緑江

の兩岸に、死体の山を築くことになったのだ。

その赤軍が、蹂躪ふしんされている。

鴨緑江の河口沖に布陣ふじんした日本海軍の艦艇によって、一方的に叩かれてゐる。

歩兵や戦車は言うに及ばず、砲兵部隊——赤軍では「戦場の神」と呼ばれ、最も力が注がれてきた兵科でさえ、例外ではない。

現用の火砲の中で、最大の射程距離を誇る一二三ミリ野砲でさえ、目標に射弾を届かせることができず、射程外から一方的な攻撃を受けている。

(三五年前に比べ、何という違いだ)

クリムツォフは慨嘆がたんした。

一九〇四年から五年にかけて戦われた対日戦争のとき、クリムツォフは遼東半島旅順りょうとうの沿岸砲台で勤務していた。

当時は一〇代の少年兵であり、基礎訓練を終えて配属されたばかりだったため、もっぱら伝令を務めていたが、砲撃の場面は一度ならず目撃している。

砲台に据え付けられた二八センチ臼砲きゅうぼう、二五センチ加農砲等の猛射が、旅順港への接近を図る日本軍艦を追い散らす様を、驚きの眼で見つめたものだ。この当時は、地上部隊が持つ巨砲は、軍艦に対し、圧倒的に優勢だった。

だが、あれから三五年が経過した今、立場は逆転している。

沿岸砲台と野砲の違いはあれど、赤軍砲兵は日本軍艦に全く歯が立たない。

クリムツォフは兵からの叩き上げで士官に昇り、年齢よせい五〇にしてようやく大尉の階級を得たが、少年の日に見た沿岸砲台の威力は、はっきりと眼の奥に焼き付いている。

その身には、目の前の光景が、途方もなく理不尽りふじんなことに感じられた。

「伝令！」

爆煙や土埃つちぼこりが漂う中、一人の兵が、クリムツォフの中隊本部に駆け込んだ。

「同志連隊長からの命令をお伝えします。第三中隊は、現在位置より後退。『ヨールカ陣地』にて態勢を立て直せ、であります！」

「御苦労！」

クリムツォフは伝令を下がらせ、コロリヨフに命じた。

「各隊に伝令。現在位置より後退し、『ヨールカ陣地』に移動せよ」

「ヨールカ陣地」とは、現在位置より二〇〇〇メートルほど内陸に入った場所だ。

日本軍の戦艦は、いずれ内陸を叩くため、陸地に接近して来る。

そこを狙って反撃しようというのが、連隊長の考えであろう。

「我が中隊は、まだ健在だ。赤軍砲兵の意地を見せしてくれるぞ、日本人」

クリムツォフが呟いたときだった。

新たな敵弾の飛翔音が聞こえ始め、急速に迫って

きた。

「全員、その場に伏せろ！」

クリムツォフは頭を抱え、地面に身を投げ出しながら、あらん限りの大声で叫んだ。身体も、口も、直感が命じるままに動いたのだ。

それが無益であったことを、クリムツォフは数秒後に悟った。

生涯で初めて経験する、凄まじい衝撃が襲いかかり、地面に突っ伏していたクリムツォフの肉体は、空中高く舞い上がった。

真円しんえんに近いほど大きく見開いたクリムツォフの眼に、補給用トラックの荷台を引き裂いて奔騰する、巨大な火柱が見えた。

そのトラックが、一二ミリ砲の弾薬箱を満載していたことを思い出した直後、人間の頭ほどもある破片がクリムツォフ目がけて飛んで来た。

旅順の砲台が二五センチ加農砲を発射した瞬間、旅順要塞の降伏開城、世界大戦、ロシア革命と新生

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。